

第七次福井市総合計画審議会 専門部会 第4部会（第1回）

■日 時：平成27年6月22日（月）13:30～15:30

■場 所：福井市役所 別館4階 14C会議室

■出席者：別紙のとおり

■会議内容

1. 開会

司 会

ただいまから、福井市総合計画審議会教育分野の第4部会を開催させていただきます。委員の皆様方には、大変お忙しいところご出席いただきまして、ありがとうございます。まず最初に、総合政策室の山田室長より、一言ごあいさつ申し上げます。

2. あいさつ

事務局（山田総合政策室長）

本日は、お忙しいところ、第七次福井市総合計画の審議会、第4部会にご出席いただきまして、本当にありがとうございます。

今日は狭いところで、職員もいっぱい来ています。密な議論をしたいと思って、こういう場所を選びましたけれども、あまり暑苦しそうであれば、大きな場所もまた考えていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

この前、審議会もございまして、その場でいろいろな意見を頂きました。結構、厳しい意見といいますか、やはり真剣に考えていただくうえでは必要な、いろいろなご意見を頂いたかなと思っております。

本日は教育の部会ということで、そういう部分を中心にいろいろご意見を頂きたいなと思っています。また、当然、福井市の全体がどうあるべきかというところの議論も、今後必要だと思っていますので、さまざまな観点でいろいろなご意見を頂きたいと思っております。本日は、各教育関係の部署も部局も来ています。資料も、これだけでは、なかなかリアリティーのある議論ができないかとも思っていますので、いろいろなことでご質問等があれば、こちらの方に振っていただいても結構かと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思っております。

簡単ではございますが、開会にあたって、一言ごあいさつとさせていただきます。どうか、よろしくお願いします。

司 会

それではここで、島田部会長より、一言ごあいさつを頂きたいと思っております。

島田部会長

このたび、第4部会の部会長を務めさせていただくことになりました、島田と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

私は、仁愛女子短期大学の生活科学学科に所属しております、日ごろは情報教育の担当をしています。最近の情報環境というのは、われわれの暮らしにも不可欠となって、本当に激しい変化をもたらしております。そういったことで学生の皆さんに、ぜひこれからの変化にも耐えうるように、しっかりとした基礎を身に付けていただきたいということで、教育活動に励んでいます。

今回は、第4部会ということで、テーマは教育、「みんなが学び成長するまち」ということでございます。皆様を拝見しますと、さまざまな分野からの委員のご出席ということを知っておりますので、できるだけ活発なご意見、ご討論をしていただきまして、この部会として、これからの次世代を担う若者、あるいはわれわれ市民が生き生きとして暮らせる、そういう生きがいのあるまちづくりということで、答申をまとめたいと思っております。ご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

3. 自己紹介

司 会

それでは、本日は第1回目の会議となりますので、委員さん方は初めての顔合わせになられると思います。ここで簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。すみませんが、桶師委員さんから順次、お願いします。

桶師委員

私は、福井市連合婦人会の会長をしております、桶師といいます。子どもたちの関わりでは、この間まで児童館へ行っておりまして、昔は保育所へも行っていましたので、そんな関係で少しずつ勉強をしたいなと思っております。よろしくお願いします。

加藤委員

皆さん、こんにちは。福井市議会からこの委員としてまいりました、加藤です。よろしくお願いします。

鈴木委員

皆さん、こんにちは。福井青年会議所から来ました、鈴木と申します。将来を語るのは楽しいと思いますので、一緒にいろいろと学びたいと思います。よろしくお願いします。

森岡委員

皆さん、こんにちは。この2月にUターンしてきました、森岡咲子と申します。駅の方で今、ゲストハウスを開業すべく準備中です。家を1軒買いまして、自分でセルフリノベーションをしながらやっております。よろしくお願いします。

齋藤委員

皆さん、こんにちは。私は、福井県こどもNPOセンターというNPO団体の理事長をしております。こどもNPOセンターは、1999年に福井県で初めてNPO団体として認可され、昨年の12月には認定NPOという、これも福井県で初めて、もう1つ信頼度の高いNPOであることが認定されまして、これからまた、いろいろな方面の方々にご協力を頂いて、子どもの関係のことをやっていきたいと思っております。よろしく、お願いいたします。

佐々木委員

皆さん、こんにちは。仁愛女子短期大学の佐々木瑠奈と申します。2年生なので、今年

で最後の学生生活ですが、大学生目線で福井市の将来のことなどを考えていけたらいいなと思います。お願いします。

司 会

どうも、ありがとうございます。

庁内に策定会議を設置しておりまして、各部局の次長がそのメンバーになっております。この第4部会は教育分野ですから、教育委員会事務局の次長が出席しておりますので、次長のみご紹介いたします。

事務局（東教育委員会次長）

はじめまして。教育委員会の次長をしております、東と申します。この部会を担当しますので、よろしくお願いします。

教育の部会は、他の部会と違って担当の部署が1つという、まさに教育の仕事は非常に大事な仕事でございます。私ども教育委員会も、市民憲章というものを推進しながらやっていますが、その5番目に「すすんで 教育を重んじ 清新な文化のまちを つりましょう」を基本として、いろいろな政策に取り組んでおります。

今日は、所属長が教育委員会ですのでたくさんおりますけれども、皆一緒に話を聞かせていただきまして、新しい第七次総合計画の中の教育の部分を、ぜひ皆様のご意見を一緒にかたちづくっていきたいと思いますので、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

司 会

それでは、部会の進行につきましては、島田部会長の方をお願いをしておりますので、どうか、よろしくお願いいたします。

島田部会長

なにぶん初めてでございますので、スムーズな議事が進行できるかどうか、ご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、審議に入りたいと思います。第4部会では、基本目標4ということで、「みんなが学び成長するまち」について審議をしていくということでございます。まず、事務局より説明をお願いしたいと思います。

4. 審議

基本目標4「みんなが学び成長するまち」について

【資料】・第七次福井市総合計画（素案）

・人口構造 および 転入・転出に関する追加資料

事務局（山田総合政策室長）

私の方から、今回の第七次にあたって、この分野についてポイントとしたい部分を若干ご説明したいと思います。教育は、ずっと継続してやっている部分ですが、その中で福井県といいますか、福井市も含めて、全国トップレベルの学力、体力があると、こういうことをうまく生かしたさらなる教育環境の充実、このあたりが第七次で考えていきたいポイントかなと思っています。

それと、生涯スポーツというような部分も、政策の中にはあるかと思いますが、今回国体が開かれます。さらにオリンピックということも、その後につながっていきますので、そのあたりをうまく活用してというか、それを契機とした生涯スポーツのさらなる発展、

そういうところが今回のポイントかなと思っています。

最後に、歴史や文化などでございますが、来春には西口の再開発ビルのところにドームシアター、自然史博物館の分館がオープンします。そういうところで自然科学の教育が充実していけるのではないかと思いますので、そこを活用した話をうまく第七次に取り入れていきたいというところでございます。

今日、お手元にお持ちいただいている資料の概要については、事務局の方から説明をさせていただきます。

事務局（総合政策室 落合）

続きまして、第4部会の政策が3つございますので、それぞれについて簡単に説明をさせていただきます。最初はお手元の19ページです。政策の12です。

こちらは子どもの教育全般に関する政策が書いてあります。現状と課題といたしましては、帰宅後のネット環境やグローバル化など、そういった子どもたちを取り巻く環境が急激に変化しているということが挙げられます。そうした中で、今まで以上に、将来を担う子どもたちの確かな学力、豊かな心、健やかな体を育てていくことが求められているのではないかと思います。具体的には、学校のみならず家庭や地域と連携した教育、健康増進を図るための保健体育、給食の充実、そしてそれらを実行するために、安心安全な学習環境の整備を施策に盛り込んでいます。

次の20ページ、政策の13です。こちらは、主に生涯学習と生涯スポーツに関する政策になっております。現状と課題といたしましては、市民の生きがいづくりや、自己実現への要求がさらに多様化してきております。そういったニーズや課題を、的確に捉えた学習機会の提供が求められています。

また、昨今の市民の健康志向や健康ブームに応じて、気軽にスポーツに親しんだり、楽しんだりできる環境づくりも、重要性を増してきているのではないかと思います。具体的には、子どもから高齢者まで、自主的に学習に取り組めるような、地域や社会教育の拠点である公民館や図書館の充実を図ること。また、先ほど室長の方からありましたけれども、2018年開催の国体、全国障害者スポーツ大会を契機に、市民一人ひとりが気軽にスポーツに参加して、健康な生活を送れるような施策を盛り込んでおります。

最後の21ページが政策14になります。こちらは、歴史や文化、芸術に関する政策となっております。現状と課題としましては、市民の価値観の変化やライフスタイルの多様化、こういったものが進む中で、優れた文化芸術を鑑賞できる機会の提供や、文化・創作活動を通じた心の豊かさ、ゆとりある暮らしが求められております。

また、先人たちが築き上げてきた文化財の保存継承、そういったものの積極的な活用も期待されているところでございます。具体的には、市民や各団体が行う文化芸術活動を支援したり、魅力ある企画展を開催したりするなど、市民が誇りの持てる文化を振興していきます。また、文化や歴史を次世代へ継承するために、個性や魅力の発信を施策に盛り込んでいます。

事務局（総合政策室 山口）

引き続き、本日配布いたしましたA4の6ページ、7ページ程度の、人口に関する資料がございます。お時間を頂戴いたしまして、簡単にご説明をさせていただきたいと思えます。

こちらは教育の部会ということでございまして、これからの子どもの数はどうなっていくのか、また、高校、大学と進学するにつれて、都会に出ていってしまうということが感

覚的に分かってはいても、ではどこへ出ていってしまうのだろうということを、調査したものでございます。

まず1ページ目でございます。こちらは、2010年が26万7千人という福井の人口ですが、2040年の30年後には5万人ほど減ってしまう、5万人というのは相当な数ですが、減ってしまうという推計が、国の機関である国立社会保障・人口問題研究所でなされてるというグラフでございます。

1ページおめくりいただきまして、2ページです。年齢3区分別の人口の推計とございます。同じように5年刻みで書いてありますが、左下に凡例がございます。色の濃いのが65歳以上の高齢者、真ん中が生産年齢人口、白いところが0歳～14歳の年少人口となっております。2010年のところで、子どもさんは3万6千人、約13.6%いらっしゃるのが、30年後の2040年には2万3千人ということで、1万3千人、約3分の1の子どもが減ってしまうということが推計で出ております。

逆に高齢者はどうなるかというと、今6万5千人が、30年後の2040年には8万3千人ということで、高齢率も4割近くになるということが予想されています。同じように、生産年齢人口の働く方というのも減っていきますので、非常に厳しい社会になっていくということがわかります。

それを、人口ピラミッドで見たのが3ページ目になります。真ん中が現状、2010年です。一番直近の国勢調査で取ったものです。それぞれ、左、右が30年前と30年後の推計となります。30年前は、こちらの人口ピラミッドはピラミッドらしい形をしておりますが、2010年、今すでにピラミッドの形は崩れておりまして、コメントに書いてございますが、親年代の減少がすでに始まっております。若い世代が減って、親になって子どもを産むころには、子どもが少ししか生まれないという人口構造が出来上がっている結果、2040年にはピラミッドをひっくり返したような形になってしまいます。このままいくと、負のスパイラルが引き起こされるということが想定されております。

続いて4ページ目です。今までは人口の、生まれるとか亡くなるということに着目していましたが、転入・転出に着目したもので見ますと、こちらは県外との転入・転出をグラフで表したものです。男性が左側、女性が右側になります。棒グラフの上の方が転入、下の方が転出です。差し引きを折れ線グラフで示しております。男性と女性を比べますと、形はよく似ているんですが、やはり男性の方が転入・転出ともにボリュームが大きい、県外との移動は男性の方が多いということが見て取れます。

ただ、その差し引きとなりますと、折れ線グラフの形は男女共によく似ております。出ていったまま戻ってこないというのは、グラフで見ますと、女性の方が出ていった数のわりには戻ってこないということで、「いっぺん出ていったら、戻ってこないね」と感覚的に言われるのは、この辺のことではないかなと感じます。

あと、出ていく、出ていかないでいいますと、その差が大きいのは20歳代です。やはりここが、折れ線グラフが下に下がっていて、転出が多いところになっています。30歳代、40歳代になりますと、もうほとんど転入・転出は均衡した形になります。例えば東京へ転勤ですと、替わりの人がやってくるわけですから、転入・転出は人が入れ替わるだけということかもしれないと推察をしております。

続きまして、5ページ目です。では、転入・転出の相手先はどちらなのだろうということで、転入・転出の差し引きで、転出超過が多い順番に都道府県名を並べてみたのがこのグラフです。左側から、石川県、東京都、大阪府、神奈川県、静岡県、愛知県という順番に並んでおります。想像通りなんですが、首都圏、中京圏、近畿圏、この転入・転出が非

常にボリュームとしても、差し引きとしても大きく、社会動態のほとんどがそこで占められているということがわかります。

ただ、神奈川県、静岡県が4番目、5番目にございましたけれども、6番目の愛知県は、差し引きにするとそこそこですが、ボリュームが非常に大きいということです。非常に転入・転出では、福井県、福井市との関わりあいや、つながりが深いのが愛知県ではないかということが見て取れます。

あと、大都市圏以外では、一番左側の石川県です。同じ隣接県でも滋賀県は、実は後ろから3番目ですが、北の隣の石川県は、転入・転出も一番大きいということがわかっております。

続いて6ページ目です。今までは県外を見てきましたが、県内についてはどうでしょうかということで、県内各市町との転入・転出をグラフに表したものです。

直近20年間の毎年の転入と転出の差し引きを、折れ線グラフで起こしたものです。一番顕著なのが、赤の点線の坂井市です。15年前、20年前は、福井市から転出する方がものすごく多かったということですが、近年は、坂井市のみならず他のどこもですが、ほとんどが福井市へ転入する側になっております。日本の縮図ではないですが、県内においては福井市がやはり都心であって、福井市に人が集まるという傾向が強まってきていることがわかっております。

以上、ちょっと早口になりましたが、人口構造と転入・転出に関する追加資料のご説明とさせていただきます。

島田部会長

どうも、ありがとうございます。ただいま説明がございましたけれども、基本目標4に関する政策、施策です。施策（しさく）というのは同音が多いんで、慣例に基づいて施策（せさく）と言わせていただきます。それに関して委員の皆様の気になる点、関心のある点ということで、ご質問、ご意見等をお受けしたいと思います。

ご発言をされるときには、まずお名前をお願いしたいと思います。なかなか、自由にとっても難しいかなとは思いますが。今回を含めまして2回の議論でということになっております。まずこの資料の19ページに、現状、課題というのがあります。

今日は、できれば政策の12、13、14の21ページまでの現状、課題のところを議論して、政策の妥当性といったことを確認できればと思っております。いかがでしょうか。19ページ目のところから、まずご意見を頂くというかたちで。ここは、教育に関することだと思うんですが。

森岡委員

森岡です。私は、今回初めて参加させてもらっていて、今回と次回の専門部会で各論を議論するという話ですけども、目標、ゴールとしては、ここの政策の言葉を作り込んでいくという感じになるんですか。われわれは委員としてどういうものを出せばよいのでしょうか。

島田部会長

私の理解しているところでは、現状、課題と書かれていますので、市の方でこういった分析をしていただいていることに対して、政策を立てていく方向として、この分析が妥当なものであるということの確認。そして、その確認をしたうえで、政策というところだと思います。

また、政策を受けての施策、そういったところが、これも妥当かどうか、網羅されているかどうかを、いろいろな意見を頂きながら確認していくことだと考えているんですが。

森岡委員

われわれ、個人的に感じている現状の課題とかが、ここにちゃんと反映されているかどうかというところですか。

島田部会長

そうです。反映されるような仕組みになっているかどうかということだと思います。

森岡委員

仕組みが入っているかどうか。

島田部会長

それでよろしいでしょうかね、事務局。

事務局（山田総合政策室長）

総合計画自体の答申を受けるというのは、29年から始まる5年間の計画をどういう方向でやっていくか、それは大きな意味では将来都市像としています。そこから4つの基本目標というのを市として決めました。それを受けて、それぞれ政策をどうしていくか、あるいは施策という動きをしていって、全体をまた最終的には審議会で議論していただいて、答申を頂くという形なんですけれども。

これが、これまでずっと培われてきたうちの総合計画の作り方です。そういうところにメスを入れることも、大きくは考えられるとは思っていますが、そうすると全体の議論だけでは大きすぎて、なかなか議論ができないということで、部会に分けて、今回は教育部会で、今、市の方として考えているところに対してご意見を頂くというのが、取っ掛かりとしては一番始めやすいと思っています。

そこから、いろいろと皆さんの中から新たな意見が出てきて、政策もごろっと変えるという話もゼロではないと思っていますので、その辺は、最終的にはお任せにはなりますけれども、議論の仕方としては、こういう段階に分けて議論していただければ、わかりやすいかなというところです。

齋藤委員

この施策全体を見せていただいて、決して悪いことは1つもないと思います。目標として掲げるべきものという点では、こうなしてほしいとか、こうあるべきだという理想像がちゃんと書かれていると思うのですが、それが実際に予算に反映しているかという点、また全然別問題です。

例えば、こちらの14番のところに、「市民の文化芸術活動を支援するとともに優れた文化芸術に触れる機会を創出し」と書かれているんですが。子どもたちに、学校公演として文化会館などで生の演劇舞台を見せることを、私たちは福井市の助成を受けてやっていましたが、もう予算がカットされてなくなっています。あるいは、図書館の充実を図るということも書かれているんですが、福井市の助成金で図書館の支援員を派遣するということを提案したのですが、それは予算がないからということで削られたりして。

書かれていること自体は、私はみんな素晴らしいと思うのですが、それが本当に実行されているとか、予算に反映されているのかとか、そういうところというのは、今この文面の話をして、進まないんじゃないかと思うのですが。そんなところは、この部会では

関係ないところなのかとも思ったりします。

事務局（山田総合政策室長）

先週は3つの部会をやりました。個々の施策に書かれていることだけでは、言葉だけでリアリティーが非常にないと。むしろ、関心があるのはそこから先の、じゃあ、具体的にどう取り組むのかという意見はいっぱい伺っています。

なので、施策の議論をしていく中に、その言葉の意味はこういうことをやってもらいたいかからその言葉があるんだとか、その具体的なことを言っていただければ、また反映をさせるようにはしていきます。こういう施策の方向性というのは、うちの実施計画で、実際の取り組みをしようというところを、もう少し前に出した方がいいんじゃないか、もっとこっち側に持ってきた方がいいんじゃないかというような話も、当然あると思います。あるいは特出しをしていくとか、その辺はいろいろとやっていきたいと思っています。

基本的に個々の政策とか施策に書かれている話を尊重して、予算なり事業をやっていくのが行政側の役目だと思っているんですが、場合によっては、お金の関係で、すぐにはできないということはあるのかもしれませんが、できるだけここに書いてあることを尊重してやっていくということです。

具体的にやりたいところがあって、どうしてもそこをやれということであれば、もう少し前に出すとか、具体的にこれをやる意味はそういうことだとおっしゃっていただければ、それは反映させていきたいと思います。

齋藤委員

私などは、逆に、例えば素晴らしい芸術の鑑賞をすると書かれていたら、行政の方はどうかたちで施策に反映していられるのかという具体案を、どういうことを思っているのかというところが聞きたいというか。

私たちは、そういう舞台鑑賞の機会を提案しても、年々予算が減らされて、最近はどうなくなってしまったということで、ここに書かれている方向性とは、市民の印象としては逆な気がするのですが、行政の方では、これを実現するためにどういうことをやっていらっしゃるのかというのを聞きたかったんです。

事務局（山田総合政策室長）

1回目に審議会のところでお渡しした中に、これは六次の話ですけども、こういう総合計画を受けて実施計画というものを作っています。だからできるだけ反映して、こういう5年間の計画を作ります。今回のこの七次の総合計画も、こういう政策、施策のところを受けて、これは予算も絡みますので、行政の方で作り上げていって、これを随時チェックしていただくというようなところも必要かなと思っています。作り方としてはそういうことをやりますが。

施策に書いてある意味はこういう意味だから、こういう分野はぜひとも必要なんだというところは、おっしゃっていただければ、また特に入れるように考えもしますので。

齋藤委員

もう1つ、よろしいですか。先ほど、こちらの人口減少の話を、すごく丁寧にご説明いただいととてもわかりやすかったんですが、人口が2040年には5万人減るとか、子どもの数がとても減るといのは、確かにすごく怖い気はするんです。どんな社会になるのかなというの、今は想像がつかないとは思いますが。ただ、これは決して福井市だけの話だけではなくて、日本全国、東京ですらもうじき人口が減りだすといっているわけです。

その中で、福井が、高齢化したり、人口が減少したりしていっても、豊かな生活ができるんだよという新しいモデルを考えていきたいという、そういう前向きな感じで捉えて施策を考えられたらなと思います。

事務局（山田総合政策室長）

その辺は、前向きなご意見を伺って、総合計画にも書きます。あと、前回にも言いましたが、地方創生の総合戦略ということで、人口減少でどうするかというものを立てていますので、そこにも反映させます。そのあたりは、もう少しこちらの方で整理できたら、また皆さんにもご意見を伺いたいと思っています。よろしくお願いします。お返しします。

島田部会長

他に委員の方でないですか。

鈴木委員

これは、部会長は意見や発言をしては駄目なんですか。

事務局（山田総合政策室長）

全然、そんな堅苦しくないと思っていただければ結構です。審議では座っていてもらって、場合によっては、黒板とかを置いたり、立ち上がっていろいろ言ってもらってもいいです。こういうふうな感じなんですけど、こっちも、場合によってはその意見に対していろいろ言わせてもらおうと思います。なかなか難しいですけども、当然委員長も部会長も発言をされると思いますし。

鈴木委員

今の齋藤さんの意見で、この追加資料を見せてもらって、これをマイナスかプラスかと捉えたら、僕は結構プラスに捉えるんですけども。ここの施策の中にもし入れてほしいものがあるとすれば、子どもを見守る大人が多くなるというのは、決して悪いことではないと思うんです。じゃあ、見守り方だなと。

これは、行政側としては予算が減るとか、財源が減るとかという意味ではマイナスの話なのかもしれませんが、教育という観点から、人が子どもを支えるという観点から見ると、どうやって支えるかという方向次第では、ものすごくいい転機になってくるかなと。40年後に、どういった子どもたちが世界に旅立っていくのかというのは、今のわれわれがつくるんだなと。そういう観点で、グローバルとか、そういった歴史とかというのも、子どもに語り継ぐような歴史があったり、そういうのが欲しいなとは思っています。決してマイナスではないんじゃないかなと、これを見て思いました。

いつも思うんですが、人口減少になると、今はすごくマイナス、減少というのはあるんですが、確かに人口減少はするんですが、他の国でいったら6,000万人が当たり前の社会なんていっぱいあるわけじゃないですか。

この変化するというのが、たぶんものすごく怖いんだと思うわけですね。だから、この変化をするというのが、どう影響を及すかというところをしっかりと据えていないと、なぜこれに取り組む必要があるのかというのが、見えてこないのかなと思います。

子どもたちの社会環境がどう変わっていくのかとか、見えにくいところはたくさんあると思うんですけど、この人口変化が及ぼす教育の観点というのはこうなんですとやらないと、この資料というのは、もしかしたら不安をあおる材料になってしまっている。

転出するとか、人が動くのは、僕はものすごくいいことじゃないのかなと思っています。

ここに外国人労働者が入ってくるということも、子どもたちにとってみれば、もしかしたらグローバルという視点なら、すごくいいんじゃないかなと思います。

だから、何が課題で、何がメリットでといったところは、ここからもう少し資料として、教育の視点として落としこむ必要があるんじゃないかと思いました。

島田部会長

ありがとうございました。まだご発言していらっしゃる委員の方、いかがですか。

桶師委員

人口が減るとするのは、先ほどからずっと言っていますが、うちの娘や息子たちも、やはり仕事がないと、ここにいたいということになりません。うちの娘は、仁愛大学を出まして地元のセーレンに就職をしたんです。これでずっと地元に来てくれると思っていたんですが、一時不況になって、自分はデッサンで入ったのに違う内容の仕事に変わってしまって、それでは私のやりたいことができないということで、どこかへ出ていくことになりました。

仕事がたくさんあって、これを選んでやろうというものがあれば、地元にもいられます。そうすると、充実した会社がないと駄目ということになるし、安定した仕事でも、今年のように大手の会社がちょっと不安になったりすれば、困るなという感じです。

仕事があるのが一番かなと思うと、豊かな福井でないと戻ってくれないという感じになるし。それをするには、地面があるんだからまだ農業があると思っていると、今は電気会社がレタスなんかを作りはじめているから、農業もそっちに取られてしまうなという感じもあります。何がよくて何が悪いのかなというのが、なかなか読めないですね。それでどうしたらいいのかなと思うわけです。

私は会社を経営していますが、勤め人がたくさんいて、募集するけど安い月給ではなかなか来ない、選んで来るというような感じです。国も、産めよ、増やせよというように、ものすごくあおるじゃないですか。家族を増やしましょう、女性には優しくしましょうという、お父さんも一緒になって学校へ行ったり、そういうことをしたいんです。

でも、金があつてということになると、すぐ辞めて、有給もあれも全部くださいと。あなたの会社はここからこの時間帯が継続になっていないので、その休んでいた時間、要するに8時間休まなきゃいけないのに、朝早く出てもらった2時間が足りないということで、その分の超過の時間をくださいとか。向こうの社労士さんが来て、「そうですよ、やんなさいよ」と指令をしてきたりすると、会社を大きく育てるのも厳しいです。

また、子どもをたくさん増やせと、子どもを4人産みましたから、それ全部の有給をください、何とかをください、奥さんが子どもを産んだけど、お父さんもくださいということになると、私のところのような小さな会社では、なかなかねという感じです。だけどそれも育てなきゃいけないし、会社も育たない。どうしたらいいのかということで、すごく私は真ん中にいて困っているような現状です。正社員にしないといけないということで、正社員にすればするほど、そういうことがきつくなるしという感じです。何がいいのかなと困っているような状態の中で発言をどうしたらいいかな。

子どものためには、先ほどおっしゃった、学童のことはよく分かっているのですが、美術館とかへ連れていきたい、遠いところだからバスを出してもらえるかと聞くと、「いや、自分のところの予算内でやんなさい」となると、予算はこれだけしかないし、予算オーバーになるから、そんなのは見せられないわということになる。

私は民話委員サークルもやっているのですが、ボランティアの方をお願いしてという感じでやるほうがいいなとか。そうすると、年がいった方でも、無料というのはおかしいですが、保険は掛けないといけなけれども、そういう方を少しずつ使ってお手伝いをしてもらうのほうがいいかなという感じです。

今のところは、子どもこのことを考えれば、たくさん考えていろいろなことをしたいし、会社のことを考えると、会社はこんなだしということで、今、本当に悩んでいる、福井のことでという感じで悩んでいます。

ごめんなさい。とりとめのないことを言ってしまっ。わからなかったんです。

島田部会長

いろいろな教育という意味では、大学ですと、できるだけ地域で学べという方向に来てはいるんですが。

そういう立場でいくと、学生の佐々木さんはどうですか。今は出口の就職も難しいといわれている中で、学びでボランティアがいろいろな手助けをしてくれるというご意見がありましたけど、佐々木さんは、何か学生として。

ボランティアというか、社会に出るとか、そういうような部分で。

佐々木委員

私たちは、仁愛女子短期大学の友達が多いので、福井県内で入学して学ぶということは、結構県内での就職を考えている子たちが多いので、周りの子は県外への憧れとかはあまりなくて、中小企業で働きたいなという子が多いです。

ふるさと愛とか、農業、自然を大切にするとか、そういう面での就職を考えている子は少なく、発展させたい、発展したいという、福井で都会に憧れるみたいな、そういう学生の方が多いと思います。何って言えばいいんですか。わかりますか。

森岡委員

すごい、わかる。

桶師委員

わかります。

佐々木委員

ありがとうございます。

森岡委員

発言してもいいですか。私はすごくさっきから発言をしたくて。

森岡です。私は、高校を卒業して、もう福井なんかには戻りたくないと思って東京に出ていきました。私は東京大学経済学部卒業なんですが、学力を高くするとみんな県外に行くんですよ。偏差値じゃないですけど、偏差値だけで見たら、福井でやりたいことなんてないよというか、やれることなんかないだろうみたいに思ってしまうんですよ。学力が高くなればなるほどというか。だからすごくよくわかる。

福井の中でジレンマを抱えている高校生ぐらいの子たちになると、「福井にいなさい」と周りから言われるけど、やはり外の世界を知らないと、出たことがないと、福井が解らないし、県外みたいに福井にもなってほしいと思ってしまうんです。

私が帰ってきた理由は、福井に面白いことが今、起こり始めていると思ったからです。

別に、福井のインフラが整備されているからとか、子どもを産みやすいからじゃなくて、何か面白そうな人がいて、面白そうなことをやっていて、私も仕事がないと思っていたけど、やりたいことが見つかったから、じゃあ、自分で仕事を始めようと思って戻ってきたんです。

その辺がすごいジレンマで。福井は教育立県と言っているけど、グローバルというものもあるけど、福井に居ながらにして、世界の地方とつながるというようなことを、今、福井でやり始めている人たちがいるんですよね。だから福井の目指す方向というのは、私はそっちではないかなと思っています。

福井に居ながらにして視野を広く持つということは、できる時代になってきていると思います。でも、そのためにはいったん外に出ないと駄目じゃないかと思うんです。だから、「かえりたくなるまち ふくい」なのかなと、そういう理解を私はしているんですけど。

子どもたちが普通に勉強をしたり、日常生活を営んでいたりしている中に、そういう変な大人というか、この人、何してるんだろうみたいな人がいて、子どもたちがそういう人たちに触れて、福井でもこんな面白いことがやれるんだという希望を持てば、たぶん戻ってくると思います。

外に出ていっても、大きい会社に就職をするということももちろんありますが、こんなことができるかも、あんなことができるかもと、自分が自ら何かできるのではないかと思う人が増えていく方向が、私自身としては、福井の未来ではないかと思っています。以上でした。

島田部会長

なかなか、大事な意見でした。

鈴木委員

今のお2人の話を聞いていて、まさにそうだなと思います。さっきの労働に対する保障の話も、結局、税金も同じですけど、誰かが負担をするんです。別に、社長が負担をするわけでも何でもないんですよ。みんなで負担して、それを社員として保障するんです。そういう意識が薄れているということは、間違いなくあると思います。当たり前のように育児休暇をもらう。それもわかるんですが、それはみんなで保障するものであって、決して会社の経営者が負担をするものではないんです。

今の話も、もうまったくそのとおりだと思います。僕が、最近いろいろな人にお話を聞いていて、薄れていると思うのは、日本人には、労働ではなくて勤労という考え方があるんです。謹んで受ける。だから面白いんだよ。労働というと、生きていくために食べるという感じです。でも、勤労となった瞬間、謹んでもらう、伏して頂くとなるんです。それは護国神社の方が言っておられましたが、まさにそういう感覚だなと思いました。

僕らも青年会議所の活動で、子どもたちのところで出張授業をします。授業費なんてほとんどないですよ。そこへ行くじゃないですか。子どもたちが反応するのは、仕事って、めっちゃ楽しいよ、めっちゃ楽しいよというところです。みんな何で仕事をしているのかといえば、家庭のため、家族のため。それはあるかもしれないけど、俺はこうしたいんだということに対しては、子どもたちはものすごく反応するんです。それを、たぶん大人側が言えてないんだろうと思います。

去年、教育長さんが、秋田はものすごく教育にお金を掛けています。福井は全然掛けていません。でも、福井はなぜか学力ナンバーワンになるんです。これは地域と家庭のおかげですという話をしました。だったら、この地域と家庭は、子どもたちにどうい

るかですごく変わるんだな、大人の背中をどう見せるかで、すごく変わるんだなということです。

今の話をしっかり子どもたちに落とせるようになったら、保障の話なんか絶対にしないですし、みんなが迷惑を掛けるなら私はこうしますというよりも、みんなで守ろうというようになると思います。みんなであの教育を守っていこうよと。あの子が育児をするなら、社長が言わなくても、みんなで守っていきましょうよと言えたら最高じゃないですか。そういうのを僕らはこれで目指したいです。

世の中は面白いですよと、子どもにがんがん言いたいですね。そういう、コミュニティの場があると、たぶん、この将来が楽しくてしょうがないよね、福井から、外へ出ていっても私は戻ってくるよとなると思います。それが、今何ができるかの1つではないかと思っています。

お2人の話を聞いて、本当にそうだなと思ったので、意見をさせてもらいましたけど。そういうのを盛り込めると楽しいかなと思いました。

佐々木委員

今のお話で、子どもたちに、仕事ってこんなに楽しいんだよと話をすることでしたが。私の家は結構過保護で、おばあちゃんと父親の父子家庭でした。子どもがいなくなってほしくないから、「出ていかないで、出ていかないで」と親から言われたり、近所の方から「県外に就職しちゃうの。県外の大学へ行っちゃうの」と言われて、親の言いなりではないですけど、そう言われたから福井に残っているということも、ちょっとは最初のころにありました。

だから、仕事は視野を広げて楽しいんだよということは、子どもにだけではなくて、大人の方にも言ってほしいと思います。私も出たかったというのも少しあったので。出なければ福井のよさもわからないし、出なければいろいろな県外の方ともつながれないじゃないですか。子どもが少なくなるのを怖がる大人やお父さんとかが多いから、すごく守られて、残れ、残れで、外を見させてもらえないかなと私は思っています。ごめんなさい。

森岡委員

それはすごく貴重な意見ですね。

齋藤委員

よろしいですか。齋藤です。私は、鈴木委員がおっしゃったことは、すごくいいことだと思うのですが、少し理想論に走りすぎているような気はしています。

やはり、世間的に周りを見渡して、すごく自分の仕事が好きで、楽しくやっているという方が全部ではないと思うので、みんなが自分の好きなことしかないとか、自分が楽しいと思えることしかないという社会になったら、きっと成り立たないと思います。

世の中というのは、嫌なことがあっても少し我慢するとか、自分は何となく正当に評価をされてないんじゃないかと思う日があっても少し我慢するとか、そういうことの積み重ねで、また自分の新しい可能性を見いだすこともあります。若いうちは視野が狭いですから、自分がこれが好きだ、これがやりたい、これで絶対に一生頑張るということに固執しがちですけど、それは必ずしもその人にとって、すごくいいことももちろんあるんですけど、挫折したときの受け皿がなくなってしまうので、多様な価値観というものを若いうちは身に付けた方がいいと思います。

そのためには、福井だけにいたら世間が狭くなるから、本当は、県外へ出るとか、全然

違う社会に1回入るといのはすごくいいことだと思うんです。ただ、経済的に無理があったり、みんなが県外の学校に行けるおうちばかりでもないですし、それこそ大学へ行ける方ばかりでもないです。でも、本当に自分が行きたいなら何としても行ってごらんというように、親が寛容性を持つべきだと思います。

うちの娘のだんなさんは、下宿して、仕送りを受けずに自分1人で大学に行ったということで、私はそんないい人なら誰でもいいと迎え入れたんですが。そういうふうには、本当に行きたかったら、いろいろなことができるんだよという可能性を、親とか周りの大人が提示してあげる。大人は、子どもに、未来があるとか、あなたは今、学校の成績はよくないかもしれないけど、もしかしたらこんなことができるかもしれないとか、また、お父さんの仕事はこれだけど、もっと別のことに向いているかもしれないとか、いろいろなことを教えてあげたいです。

そういう大人がいっぱいいれば、子どもたちが失敗しても帰ってこられる。県外に行って、挫折するかもしれないけれど、そのときには帰ってきて、そこでもう1回やり直そうと思えるような場所になったらいいと思います。

島田部会長

そうですね。いい話を伺いました。

鈴木委員

今の斎藤さんのおっしゃる意味では、皆さんがそうだと思うんですが、この目標の「みんなが学び成長するまち」というのは、大人が大人として子どもをちゃんと受け入れるとか。そういう意味ではこの目標というのは、ここの中ではあまり議論がないかと思うんですが。

斎藤委員

ないと思います。私はここに載っている言葉はみんな素晴らしいと思います。この目標自体は、素晴らしいと思って拝見したんです。ただ、それが本当に、実際どこまで実践されているかを感じるかどうかは、また別の問題ですが。目標として、地べたを這いつくばるよりは、高い目標を掲げた方がいいと思うので、それはいいと思います。

島田部会長

今、お話がありましたように、これを教育というところで見ますと、キーワードは、国際理解とか、グローバル化とか、あとは地域にいろいろな学び場をとということがありました。

ですから、まずは地元を知って、そして地元愛を育てるというとおかしいんですけど、別に強要するわけではなくて、地元のいいところを知るために、今のお話を聞いていても、いったん外へ出ることによって地元のよさがわかる、あるいは海外に行けば日本のよさがわかるということだと思うんです。それが理想通りいかなくても、そういう教育をしていけばわかる、気付いてくれるというようなかたちに持っていくのが、ここに書いてある、いろいろな交流を通してそういうものを理解したり、グローバル化したりの方かなという気がしています。

それから、地域のいろいろな力を借りて、子どもの安全確保などが進んでいるというのも、福井の特徴ではないかなと思います。これは、私の感想ですけど、福井は雪国ですので、お互いに助け合うということが自然と昔から引き継がれてきて、そういうところがあるのではないかなと思います。

今の教育というのは、文科省だけではなくて、経済産業省においても、IT化、IT化ということで、教育の中にも入ってこようということです。結局、少子化で不足になった部分を、そういうことで補おうということですかね。大学の方では、よく知識基盤社会という言葉がキーワードとして出てくるんですが、少子化によって少人数で高度な教育というか、充実した教育ができるんであろうと。

そのポイントは何かという、県外に行くと、福井県はどんなところ、人口は何人、どんなものを食べているの、特産品はと必ず聞かれるんですけど、それが私の場合もずっとは出てこなかった部分がありますので、そういったところを日ごろから意識しています。海外へ出れば、今度は日本人というのはどういうことをしているのと聞かれます。日本人としてのアイデンティティーとか、そういった教育も必要だろうと考えています。

私の若いころは、IT社会になれば、都会に行かなくても地方にいろいろなビジネスチャンスが生まれて、山の中にいてもネットでつながっていれば仕事はできるというようなことを聞いたんですが、現実には、これだけできた。地方のビジネスチャンスは、考えていけばあるのかなという感じはしています。

ですから、現実的には、そういうコミュニティで人とのつながり、ビジネスに関しては、IT活用で地方にいてもそういうデメリットを克服していく、そういう力を付けていけるんじゃないかと感じてはいるんですが。それが私が教育のところを見させていただいたときの感想です。

あと何か他に気になったところで。

齋藤委員

齋藤です。12番の実施計画のところで、上から4つ目の問題行動への対応と書いてあるのですが、私が聞きかじった範囲なんですけど、中藤小学校という新しくできた小学校がございまして、その教室が新しいタイプのわりとバリアーがないような広い学校ですが、なかなか子どもたちが言うことを聞かないというか、先生方が困っていらっしゃるという話を聞いたことがあります。

もちろん、先進的な考えでつくられた学校だと思いますが、現実には、子どもたちはこれまで教室に20人、30人が入って、先生の言うことを聞いていく教育を受けてきたのが、いきなりそういうところに行ったので戸惑っているのかなとは思いますが。学校の作り方というのは、これからはそういう方向に持っていこうとなさっているんですか。至民中学校もそうですよね。

桶師委員

改良しましたよ。

齋藤委員

至民中学校は、去年かおとしに結構問題があったので、いろいろまた考えられたと思うんですが。

桶師委員

そうです。間仕切りを少し入れまして、すごく今は落ち着いています。

齋藤委員

その中藤小学校がこの間開校して、またそういうタイプの学校なんですけど。これからは新しく学校を建て替えるとか何とかという話になったときに、そういうふうな学校づく

りでいかれるのかどうかということをお伺いしたいと思います。

事務局（白崎教育総務課長）

教育総務です。私どもは学校のハードウェアが担当ですので、今おっしゃったような学校の現場の先生方の話は聞いていないんですが、極めて現実的なお話をします。現実的なお話としては、今後はそういう特殊な建物というのは、予算的に非常に厳しくなってくると思います。やはり、今までの建物をいかに長寿命化していくかというのが、1つの大きな課題になっています。

従いまして、こういう、実験的というと変かもしれませんが、少し変わった建物とかは、もうそうする予算的な余裕が今後は非常に厳しくなると予想されますので、現実的にはオーソドックスな学校体系が今後は続くと考えられます。

齋藤委員

予算的なことを言われると、どうしようもないんですが。実際にそういう学校をつくられて、よかったことやここはまずかったかなというようなところはございますか。

事務局（吉川学校教育課長）

学校教育課の吉川でございます。今ほどのいろいろな校舎の建築様式から、私も至民中学校におりましたし、先ほどの中藤の件につきましても、私らも十分に視察をさせてもらっている中で、教育の内容そのものが特殊なものだと僕らは思っていないです。

至民中学校は、教科センター方式というかたちで非常に目新しい部分がございました。確かに、いろいろと問題行動もございましたが、基本的な教育を根本的に変えようという意識では全然なくて、むしろ、子どもたちの多様な活動を保証しようというところから生まれてきた発想ではなかったかなと思っております。

今ほどの議論の中で、やはり子どもたちはいろいろな経験をしないといけないと思います。これまでわれわれ、僕らの子ども時代もそうでしたけれども、いわゆる教え込み中心であった教育から、文科省の方もそこから脱却という意味で、非常にいろいろな取り組みをしています。

現行の中学校1年生が大学に上がるときには、いわゆる入試改革というものがございまして、応用力、活用力というものが非常に試されるようになります。ある意味では、至民中学校などはそれを、結構先取りをしようとしたわけです。そういったところは桶師さんもよくご存じなんですが、ただ、なかなかそういったところに、子どもらの意識が高まらなかったという部分もございました。

中藤小学校についても、ある程度オープンなんですけど、今は教室としては間仕切りができるようにはなっております。ただ、ドアを開けたまま授業をしたり、そういったオープンな活動も保証している。そういった、ハードウェアではなくて、ソフトウェア的に、教育というのはこれからどんどん変わっていくと思うんですが、ただ、あくまでも基礎基本というものは非常に大事ですから、そういったところはきちんと押さえていかないといけないと思っております。

最近建ちました明道中学校なども、教科センターではないですが、教科用の特別教室というものを設けており、いわゆる国語科の部屋、数学科の教室というものがあります。それは至民と違います。至民の場合は教科ごとに子どもたちが動いていくんですが、あくまでも明道中学校は基本的にはクラスというかたちでやっています。そういったふうに、われわれとしての思いはいろいろとあるんですが、根本にあるのは、やはり子どもたちに多

様な経験をさせる中で豊かな心を育てていくということがあります。学力を高めていかないといけないということもあると思います。

必ずしもオープンにすることがいいと思っているわけではなく、そういったいろいろな考えの中で教育ができるということを、われわれは目指したいという考えでいます。

島田部会長

今はバリアフリーのことでしたけれども、生涯学習という切り口ではいかがですか。

鈴木委員

たぶん、意見は皆さんからたくさん、100人に問えば100人の答えが返ってくると思います。

僕が中学生のときは、どこの中学校というのはいえませんが、ガードマンが卒業式に並んでいたんです。河原でバットを持っていたよ。僕があるデパートの屋上へ行ったら、いきなりけんかが始まるわけです。でも今はそんなことはないですね。僕は本当に、バットで殴られるという経験を学生の人にしています。だから、まともか、まともじゃないかでいうと、今の方がずっとまともになっていると僕は少し思っています。それぐらいがいいんじゃないかと思うぐらいです。

ただ、それに立ち向かっていく大人は、とんでもなく怖いですけども。今も坂井農業高校にバイクで来る学生もいますけど、こんな程度ならかわいいなと思ってしまうくらいです。でも、これを受け止められる人がいないから、すごい大問題になっているのではないかと感じているんです。

今、それは、子どもたちをもっともっと許容したいなと思います。この「自然・活気・誇りにみちた 人が輝く かえりたくなるまち ふくい」とか、われわれがこういう教育をした結果、こういう歴史や文化を生かした個性でといったものをやった結果、どんな人が育つんですかと。これはどんな人を育てたいのですかというのは、みんなの中で共通項目、これは難しいですよ。

橋本左内先生みたいな人を育てたいですといっても、ちょっと無理な話ですね。どんな人がいいのかというのは、それぞれ映像的に思っていて。そういうところがいいな、あの人のああいうところがいいなというのを盛り込まないと、問題点ばかりを改善すると、結局、いいところをどんどんやられてしまうと、子どもたちも行く場所がなくなるというか、生きていく場所すらなくなるみたいなことに。

さっきの至民中学校は、子どもが逃げ込む場所がないんです。昔だった保健室とか、学校の裏とか、そこらあたりに逃げ込めたのに、みんなが一括のところにいと、教室を追い出されたら逃げ込む場所がないんです。だから、あんなところでぺたっと寝ていたりするわけです。

そういう子どもを、助けられるといいなと思いながら見ましたけど。ここから出てくる子どもはどうなるのかな。そういうことを策定するものは欲しいのかなと思います。地域で、子どもたちをどういうふうにしようかということ掲げるとか。

「輝く」というのは、言葉としてはすごくいい言葉ですけど、結局、子どもたちを輝かせるのに、グローバル人材をつくって、どうする人をつくりたいんですというのを、それをみんなで支えるような、人を支えるそういう検討みたいなものをするといいんじゃないかと思います。徹底的に出し合って、みんなが総意するから、地域でも子どもを見ましようよとなるんじゃないかなと。僕はちょっと政治っぽいことを話しましたけど。

僕が子どもと接するのは、1日に1回もないんです。青年会議所として活動していればありますけど、そんな状態です。でも、家庭とか学校とかは、当たり前のように接していますね。おそらく、他人事のように見ているのは僕らです。子どももいない、結婚もしていない、俺の人生にはあまり関係ない。投票率と一緒にですね。そんな人たちが、子どもが今どうなっているかも知らない、だからどうでもいい。子どもがあいさつをせずに通りすぎても、干渉しないようになっていくのではないかと思います。

こういう距離は、5年後、6年後を見据えて、何らかみんなで少しずつ埋めていく。こういう子どもが育ったらいいね、そのために僕ら大人はこうしようとか、あいさつだけは僕らから交わそうとか、そういうふうには市民の気運が高まってくると、1年ぐらいではすぐ変わらなくても、5年後ぐらいには少しよくなってくるのかなと思います。

ここでは、青少年課とかその辺になるのかはわかりませんが、そういったところはあつと話し合うといいかなと思います。子どものせいにするのはかわいそうかなと思います。僕らの責任だと思います。責任の取り方がわからないですね。

島田部会長

問題提起がありましたけれども、全国的に見ると、一応福井というのは、子どもの学力的にも、教育でも、福井モデルという言葉があるくらいです。やはり、ハード面というより、いろいろな先生方の努力によるソフト面ですね。

桶師委員

でもこの間、先生が話していたのを聞いていましたら。福井の子は勉強も、体力もあるけれども、お手伝いをしないのはワーストの方に入ると言っていました。というのは、過保護に育てて、「あんた、勉強してね」「いいよ」ということがあるんだけど、お手伝いはワーストナンバーツーかワンかは知りませんが、そんなことを言っていました。

島田部会長

むしろ、学校は宿題とか、学校で勉強は一生懸命先生がさせてくれて、家では甘やかすというとおかしいですけど、三世代のおじいさん、おばあさんというのは、孫かわいさにといいですか。

桶師委員

三世代で住んでいるから、そういう宿題をしたかという声掛けができるので、優しい子に育てはいるけれど、自から何をしたいというような進んだ子になるのは、福井県の子は弱いと言っていました。

こうしよう、ああしようと、自分から意見を言って引っ張っていくようなタイプではないけど、なぜか福井県は社長さんが多いというので、井戸の中の蛙かなと思ったりもしています。

齋藤委員

私が子育てをしているときに、子どもの同級生のお母さんがおっしゃったんですけど、横浜におうちがあつて、中学校が終わったら横浜に帰るとずっと言っていたのに、「やっぱり、高校も福井にするわ」と言われました。

福井は高校が全部面倒を見てくれるけど、横浜に帰ったら、もう学校の先生は何もしてくれないから、本当に高校の決められた授業だけをやるだけだと。だから、帰ったら塾に行ったり、予備校に行ったり、模擬試験を受けたりと、全部おうちの方がしないといけな

いので、お金も掛かると。だけど、福井にいたら全部それは高校がしてくれるので、すごく安上がりだと言われていました。先生方が本当に、毎週、毎週模擬試験とか、進路指導とかを頑張っておられるのが、たぶん結実して教育県といわれるようになったのかなと、そのときに思ったんですが。

あと、やはり子育て環境がいいというのは、都会の友達はみんな言います。それは、三世同居とは限らないんですが、近場におじいちゃん、おばあちゃんにしろ、昔から知っているおばちゃんとか、頼れる人がいるというのが大きいと言われました。働くお母さんというのもすごく多いです。

桶師委員

ちょっとだけ見ていてということですね。

齋藤委員

ところが、私たちのNPOも学童保育をやっていますが、今は、おじいちゃん、おばあちゃんが、子どもを見ないという方がすごく増えています。おじいちゃん、おばあちゃんも結構若くて、まだまだ働ける世代といいますか、労働人口が減っているので、60歳ぐらいだとまだ結構お仕事をされているんですね。自分の会社をやっている方もいらっしゃるし、あるいはどこかにパートに行っている方もいらっしゃるの、おじいちゃん、おばあちゃんもあまり頼れなくなっています。

私は木田地区で学童保育をやっているんですが、木田地区は今、家が新しくどんどん建っているの、子どもがあふれていて、「第2」という、もう1つ児童クラブを新しくつくりました。そうしたら、待機児童をなくそうということで新しくつくったら、それが今度は呼び込むんですね、需要を喚起するといいますか。預けられるんだとなつて、皆さん、来年から仕事へ行こうと思っていたのが、じゃあ、今年から行くわとなるらしくて。学童保育に預ける今年の1年生は、50%を超えています。

市役所の学校教育課の方がおっしゃっていましたが、普通は県外出身が多い東京あたりでも4割行かないのに、木田地区は5割を超えているというのは異常ですとおっしゃっていたんですけど。

施策を手厚くすることで、今度は子育てを人任せにしてしまうところがだんだんと増えてしまう。もちろん、働きたい方がいらっしゃるニーズがあるのはわかるので、そこは手当てしていかなくちゃいけないんですが、それを単に受け入れるだけではなく、その時間は安全にだけ気を配っているというだけではなく、一緒に子育てをやろうよという地域だったり、学校や学童保育だったり、親も一緒に巻き込んで子育てをしましょうという空気を、世の中でつくっていかないと駄目だろうなと思います。

鈴木委員

今のキーワードは、まさに巻き込むということですね。どれだけ、みんなを。

齋藤委員

『サザエさん』みたいなお家は、もうないですからね。

鈴木委員

去年ぐらいから、土曜学習というのを国が提言していて、それを大分の豊後高田市とかでやっています。もう1回算数を教えることになるかもしれないけれども、土曜日だけ1日どんと地域の大人で学校をしようということをやっています。

それを実際に見に行きました。「昔は、こうだったんですよ」と言われたのが、本当にかたがたの学校だったのが、いまや県内トップの学力になっていますと。学力で全部を測るわけではないですけど、子どもたちの姿勢がすごいなど。行ったら、みんながわあっと「おはようございます」と言っている。大人が怖くない。すごい。その圧倒的な力に出合って、これがやれるんだったらすごいなと思いましたけれども、なかなかね。巻き込みに成功しているのは、こういう地域になるのかなと思います。

森岡委員

中学校の先生の友達がいるんですが、教科を教えてクラスの担任も持っているんですが、結構部活動の負担が大きくて、それだけでもなくなったら、なくなったらというか地域の人が一緒にやってくれたら、だいぶ楽になるのになという事は言っていました。

今どうなっているのか存じ上げないんですが、今の土曜学習ではないですけども、そういうことも、1つの方向としてありなのかなとは思いました。

島田部会長

やはり、最初に言った少子高齢化ということで、そういう子どもの教育に対しても、地方のいろいろな地域で活動している方を巻き込んでいくということが、キーワードといえますか、一番大事なことでないかなと思います。

そういう意味では、この後ろにあります、生涯学習もありますが、いろいろな文化的なものです、休日には家族でとか、あるいは普段の学校でもそういう地域の方から学ぶとか、そういった方向性が今の課題としては出ていますが。

鈴木委員

こういった今の話を、具現化することはできるのかなと思うんですが。

事務局（山田総合政策室長）

その辺は、また聞こうと思っていました。

ただ、ある意味これはどこでも一緒かなと思います。だから、もう少しここに、例えば教育のところでも、めりはりをつけて福井のいいところが入った文言にするとか、地域を巻き込むという話を、今は教育委員会もいますので、僕の一存では言えませんが、そういうところを巻き込むような教育行政ができるのかとか、課題を少し投げただけければ、それはそれでまた総合計画も見直します。

これ自体は、あまり言うと怒られるんですが、感想としては、先ほども言いましたように、どこでも当てはめられてしまうというようなところもあるので、もう少しめりはりをつけたいところです。その辺の声を聞かせていただければまた直しますし、また、具体的にこう直せと言われると、ありがたいです。そういうことはどんどん頂ければと思います。

あと、事業の方でも、こんな事業をとというのがあれば、最初にも言いましたけど、それがもう少しこの前に出てくるといいとか。例えば、施策の言葉はいいんだけど、この下の解説が非常に抽象的すぎるとか、そういうところもあるかなと思います。言葉はいいけどその意味合いが、下に書いてある解説みたいな言葉、そこはもう少し、これはこういう意味だよというのを強調していただくとか。一番いいのは、そういう話を具体的にお決めいただくといいんですが。この辺を少し考えてほしいとか、そういう話でも結構だと思います。

鈴木委員

この、「健全な育成をはかる」というところで、「家庭や、地域、関係機関、団体が連携し」と書いてあるんです。おそらく、齋藤さんは認定NPO法人福井県こどもNPOセンターですから、子どもに直接携わっていらっしゃるんですよね、きっと。

齋藤委員

うちの団体として、いろいろなところで子どもと関わっています。

鈴木委員

関連団体って、僕らが学校に行くときはそういう立場ですけど、学校の先生ではなかなか伝えられないことを、社会人の大人として言ってねとか。あるいは、さっきの歴史でもそうなんですけど、語り部協会の人がいながら、僕らではなかなか子どもたちに伝えられないというところに、中間層の僕らが入ると伝えやすいということはよく言われます。

この関係機関のところの「連携」という言葉は、どう直したらいいかはわかりませんが、むしろ、連携しない機関を動かした方がいいんじゃないかと思うんです。無関係な人ほど伝わりやすいというか、みんなそう思っているんだと思うのかもしれないですけども。

ここの「連携し」というところが、まさに直接関わる人ではなくて、関わらない団体こそ連携しという言葉が、この健全な育成というか、地域を巻き込むというところのキーワードになるのかなと思います。

この後に続く「インターネットに関わる問題」なんて、むしろプロフェッショナルしか来ない。どんな危険が待っているかわからないですよ。これは、特定の人ではもう入れない世界になっているので、むしろこういうことなら、関係ない団体こそここにどんどん入り込んでという施策になっていくといいのかなと思います。

事務局（東教育委員会次長）

確かに、学校の中で、学校教育、社会教育も、さまざまな団体、人々の活動で成り立っていますので、例えば学校を地域の中でも、体育振興会、子ども会連合会、青少年育成審議会など、さまざまな団体があります。そこにさっきからご指摘があるような、年齢別の階層を見ても、これから人口は減っていくけれども、逆に65歳以上の人が40年間は8万人いるということですから、その人たちがどう関わっていくか、どう拾い上げていくかというのが、一番大きなまさに連携です。学校では地域協議会があって、地域の人たちといろいろな話をしながら教育を進めているというところがあります。

今、鈴木委員がおっしゃっている意味は、それは、今までつながりのある団体以外のところでもあるんじゃないのということだと思いますが、NPOなどはそうかもしれません。いろいろなかたちのNPOが生まれてきていますから、社会教育の面では公民館で子どもたちの教育をNPOが来てやっているというケースはたくさんあります。一概に見ない方がいいというのは、そのとおりだと思います。

森岡委員

あまり関係がないんですが、織田中学校で今度、子どもたちに話をしてほしいから来てくれと言われていて。3人にも声を掛けていってと言われて、どこどこ地域の誰々さんと、誰々さん。実はみんな友達だったという。知ってる、知ってるという感じで、偶然だったんですけど。

面白いと思っている人を1本釣りしているじゃないですが、来て話をしてというのは、大人たちがそういうネットワークを使って、もちろん関係団体もそうですけれども、そう

ではないところから人を引っ張ってくるみたい。組織ではない場合もあるんですよね、そういうのは、個人というか。そう思いました。

齋藤委員

今、巻き込むとか、積極的に連携していくということはとても大事だと思いますが、社会人も子どもの世界を知ろうとか、子どもたちのことを自分たちがよく理解しようという態度がすごく必要です。そうではなくて、教えてあげるよというだけだと、なかなか子どもは心を開いてくれないし。

先ほど、すごく昔は荒れていたというお話をされていましたが、今は本当に見えなくなって、例えば殴られたりとか、そういう目立たいじめはないけれども、LINEでブロックされたとか、嫌な画像を撮られてそれをばらまかれたとか。私たちは、チャイルドラインということで子どもの声を聞いているんですが、そういう話は福井でもあります。噂ですけども、実際に、某高校で非常にひどいいじめがあったという話も聞いたことがあります。

そういう、あまり大人にとっては馴染みのないツールだとか、子どもの社会がどんどん変わっていて、わからなくてもいいんですけど、それを自分はわからないからといって遠ざかるのではなくて、子どもにそれを教えてと言えればいいと思うんです。自分がわからないんだから、子どもに教えてくれる?と問い掛けたり、そういう、子どもの文化に歩み寄る気持ちというか、チャンスがたくさんあるといいと思います。

事務局（堀川青少年課長）

すみません、その話で。青少年課長ですが。

青少年課は、そういう情報の問題についていろいろと取り組む課ですが。おっしゃられたように、LINEでのいじめとか、深夜まで携帯を触っていると、そういうことで非常に不規則な生活になって、朝起きられなくなって不登校につながるとか、いろいろな問題をばらんでいます。

もちろん子どもたちも注意しないといけないんですが、その危険があるというようなことをまず保護者に知っていただく必要があるので、そういう情報モラル講習会に親にも来ていただいて、危険ドラッグなど関係ないと思っていても、どういうところから危険に誘われるかわからないので、いろいろな問題について、保護者の方にも勉強をしていただき、それを持ち帰っていただいて、今度は家族で話し合って、携帯を使うにあたってのルールを作ってくださいという指導をしています。

家庭でまず作っていただいて、今度は、学校ごとでまたルールを皆さんで話し合って、子どもたち自らが作っていただくように進めていますので、少しずつルール化されてきてはいるんですが。何時までですという制限を付けても、子どもたちは守らないということで、自らが自分たちで話し合って、じゃあ、11時までにしようとか、大人から見ると遅いかなと思うかもしれませんが、守れる範囲内の自分たちのルール作り、そこにまた親もちゃんと話し合いに参加するようにということで、今進めておりますので。

齋藤委員

とてもいいことだと思います。お子さんを持っていच्छる方はもちろんですが、社会の人がみんなそういうことを考えていけたらいいと思います。

事務局（堀川青少年課長）

なかなか学校の先生自体も、あまりスマホなどに詳しくない方もいच्छるので、保

護者も、先生も、子どもさんも、地域の方も、青少年育成市民会議という大人の方たちの団体ですが、そういう方たちにも、こういうツールがあるので講習会などをやってくださいと、こちらからもお願いはしています。

森岡委員

経験上、親や先生に言われるより、ちょっと上の経験のあるお兄さん、お姉さんぐらいに言われた方が、あ、確かにやばいみたいなの、そんなのしたくないとか、効き目がありそうな気がします。

島田部会長

ですから、そういう地域を巻き込むというのは、その必要があれば、関連の団体とか、専門家の人に協力を得られる体制ということですね。それは、必要に応じて、地域によっても違うかもしれませんが、いろいろなカタチで。学校の先生というのは、生徒にとってみればいつも見慣れた顔ですし、また、言ってるという感じになりかねませんので。あとは、世代的に近いということも大事ですね。

事務局（山田総合政策室長）

「関係機関と団体が連携し」という言葉でいうと、さらっと流れてしまうというところがあるんですね。だから、そういう意味では、今言われたようなところを強調するとか、そういうことが必要なのかなと思います。

連携という言葉はよく出てきますので、その意味が本当に深い意味で書いてあればそれでいいですけども、軽く行政の言葉で連携と書くときもありますので、そこは見極めていただいて、そういうご指摘を頂ければ、もう少し具体的に書いていくというところも必要だと思っています。

島田部会長

確におっしゃられたように、いろいろなページに連携という言葉は必ずといっていいほど出てまいりますので、それを実施に移す際に、もう少し現実的にというか、必要に応じて柔軟に予算配分をしていただけるようにしていただくと。

鈴木委員

そういう意味で今おっしゃられたとおり、問題に対する専門分野の団体とかという記載ですが、例えばインターネットならば、IT関連の企業さんとか、取り組んでいるNPOさんとか、そういった団体もそうですね。あるいは、安全確保といわれるといろいろな団体が出てくると思うんですが、子どもたちと本来は関係しないような団体とか、そういう専門的な団体というのを記載するといかがですか。僕も、どう記載すると適切なかはわからないですけども。

事務局（堀川青少年課長）

いろいろな団体がありまして、先ほど出た、青少年育成市民会議もそうですし、子ども会育成会であるとか、そういう専門的とはいえない団体というのはいっぱいあるので。

鈴木委員

これを話し始めたのは、次の生涯スポーツのところにも関わってくるんですけど、46番のところの最後の文章ですが、「市民一人ひとりが、「いつでも」、「どこでも」、「だれでも」楽しみながら運動・スポーツに参加し、健康で活気ある生活を送ることができる環境」と書いてあります。

この前、サウルコスの人と少し話をしたときに、参加をするというのが、例えば観客側、スポーツをする側、それからそれを支援する側、その支援が薄い。要は、サッカーをするのなら、ボールボーイみたいな感じでボールを拾う人とか、観客の誘導をするとか、そういったところを市民でやっていくと、もっと盛り上がるのではないかと。

だから、この「参加し、健康である」というと、本当に当事者に限られてしまいますよね。そうじゃなくて、自分の息子を連れて、やろう、やろうと、せつかく福井だからと周りに言えるような、地域でやろうとか、そんな言葉がここにあると、もっともっと参加者も、意識も増えてくるのかなと。

そういう、本来無関係だけど、見方を変えてみると関係があるねとか、楽しめるよねという人が、おのずとほかの人を連れて行って、楽しいよ、楽しかったよと言えると、市民運動というのは盛り上がっていくのではないかと思います。

事務局（東教育委員会次長）

ここの「参加し」というところが、どういう意味なのかということですね。国体などでは、今おっしゃったような支援という意味で、たくさんボランティアの方にやっていただいて、スポーツは、競技に参加することだけではないですよ。スポーツの文化を楽しんだり、そういう広げ方の表現が何かできればいいんですけど。

鈴木委員

どう言うかなんですけど、サウルコスさんとか、ミラクルエレファントさんとかあるじゃないですか。ああいったところに、福井の国民体育大会が終わっても、この意識が消えないようにというか。

これ、意識が消えたら、このスポーツのためにただ一般募集を募って、もう、終わったら解散ということならば、ここは教育としてはただのイベントになってしまいますね。この集まった人たちを、次にどうやって継続させて、じゃあ、サウルコスがJ1に行きましたというような気運をつくるぐらいの話にできれば、これは僕らが無責任に言ってしまうとんでもない話しになりますが、せつかくのきっかけがあるので継続できればいいと思います。

あと2年ありますから、それも予算を使わずに、意識的に参画していくようなことを、他団体とかと話せるといいですね。

事務局（松山国体・障害者スポーツ大会推進室長）

障害者スポーツ大会推進室長です、よろしくお願いします。

今ほどの話で、われわれは国体の準備を進めています。県と一緒にやっていきます。国体に向けて、一県民一参加、市民一参加という目標を掲げて、いろいろな市民運動をこれから展開していかなければならないということになっています。

その中で、参加というものの中にはいろいろな中身があるだろうと。当然、競技として、選手として参加する、あるいは観客として見る、あとは、支えるボランティアであるとか、運営に関わるとか、おもてなしも含めた、する、見る、支えるといったような視点で、今市民運動を展開していこうと思っています。

先ほど言ったように、われわれは国体を終わったら、それで、はい、おしまいではなくて、国体が来たから何かを残そうというような考え方の中で、せつかく何千人というボランティアを今回は募集をしますので、これで終わるのではなくて、次にまたそのボランティアを生かしていくような仕組みづくりも必要ではないかということも考えております。

その参加というところで、もし、する、見る、支えるというような言葉を入れるのであれば、そういうようなことでまた検討させていただきます。

鈴木委員

その1つの参考になるかもしれないですけど、毎年ドラゴンリバーさん主催で、足羽河原の清掃をばあっとやっていますよね。足羽河原はあれほどきれいなのに、僕らはいっぱい集まって行くんです。でも、あれが恒例になって、まち、川をきれいにしようよという、ただの意識合わせになっています。ごみなんか1つも落ちていないですよ。

でも、それでもいいですよ。こういうことができれば、スポーツっていいなと思いますよね。そういう参加をお願いします。

5. まとめ

島田部会長

現状と課題というところで、教育中心にご意見を出していただきました。もう、時間もだいぶ少なくなってきましたけど。一応計画としてはもう1回ありますので、今日のところは、教育の分野から政策へと流れができてはおりますので、この3つについては確認したということよろしいですか。次回、また施策の部分で議論をできると思いますので、そういったところでもう1歩、今日のいろいろな話を踏まえて意見を出していただけたらと思います。

そういう方向でよろしいでしょうか。なかなか今日は、この政策についてはというようなかたちでは、話は進まなかったんですけども。

事務局（山田総合政策室長）

今日頂いた意見は整理しまして、論点みたいな感じで、こういう意見が出たというのを整理したペーパーをまた事前にお渡しします。

今度は夏ごろにまたやらせていただきたいと思いますので、その前にすぐ、そういう今日出た課題だと思われるところを整理したものをお分けして、共通認識を持っていただきたいと思います。今日出た意見などを踏まえて、こちらの方で直すものは次回またお示ししたいと思います。

あと議論は、今度は8月ごろにやってまた秋ごろにと思っていますが、必要があればこだわりませんので、議論が必要であればいくらでもやらせていただきたいと思います。

また、次回には、人口減少問題というところについては、もう少し整理したものをまたお示しして、それをベースに、教育分野がそこにどう関わっているのかというところをご議論いただければいいと思っております。

こちらもしろいろと資料を用意したいと思います。ほかに、次回に何かこういう資料があればいいとか、これを議論するうえで、こんなリアリティーのある資料がもし事前に欲しいということであれば、この場で言っていただいてもいいですし、こんな資料もあれば議論しやすいのにといいものがあれば、また言っていただきたいと思います。

島田部会長

わかりました。今ありましたけれども、今日の議論というのは、そういうかたちで、一応政策の部分の3つについては確認をしました。また、次回はこれを踏まえて、もし何か資料が必要だということであれば、ご意見を出していただければと思います。

加藤委員

資料ではないけれども、本来なら、3ページあって、41番から施策のところでも1つずつかみ砕いて進めていくのが進め方としてはいいんじゃないかと思います。

ちょっと座談会っぽいので、ガス抜きで終わってしまうのでは駄目だし、先ほど図書支援員さんの補助金がカットされているとか、芸術鑑賞がカットされているとか、具体的な実施計画のところにあたるぐらいの話も出ているので、逆にそんな話を反映させてくれるのかどうかということも、ちゃんとそちらでこちらの意見を踏まえて進めてもらわないといけない。

できれば、委員さんの方としても、議論は施策までというとな本当に総花的な話になっているので、入り口ばかりになっているけど、この中でこういったことを私は1つ具体的にやってほしいというような意見も、出してもらってもいいんじゃないかと思います。

考えているならそれでいいと思いますし。各論で次はやるのかどうかは知らないけど。

事務局（山田総合政策室長）

1回目は全体を見ていただくということもあるんですけど、実際深めて見ていると、じゃあ、これが具体的にどうなっているのだというのは必ず、見ないとわからないというご意見も当然だろうと思います。

ただ、この七次の実施計画というのはまだ全然ないんです。具体的にないので、継続してやる部分が今どうなっているか、六次でずっと継続して今あるのが、ここの施策のどこに入るかというようなところで、具体的な事業も入れて説明はできると思います。まったく新たな展開の七次の実施計画は、皆さんの意見を受けて作っていくということでご理解を頂きたいです。

加藤委員

だから、具体的に思っている方もおられるだろうから、意見を出してもらって。

事務局（山田総合政策室長）

それはどんどん案を言っていただければ。一番最初にも申しましたように言っていただければと思います。

加藤委員

何か、ちょっとみなさん遠慮している感じもあるので。以上です。

島田部会長

今、加藤委員さんからもご意見がございましたように、次回につきましては、できればそれぞれの施策で、いろいろ委員の方のご意見等を頂ければと思います。

事務局としては、現在実施されているものを、今回の計画にあたって継続されると思いますか、踏襲するというのが基本でしたので、そういったところや、もっと重点的にやるというような説明を頂けると、意見も出しやすいかなと思います。

事務局（山田総合政策室長）

また、事前に部会長とも相談しまして、どういう資料で、どういう進め方でというようなことは事前にさせていただきますので、よろしくお願いします。

島田部会長

では、時間となりましたので、また次回よろしくお願いしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

6. 閉会

司 会

すみません、事務連絡をお願いしたいんですが。次回の専門部会の開催の日程です。7月23日の木曜日13時半でお願いしたいと思います。また、あらためてご案内を差し上げますので、よろしくお願いします

以 上

第七次福井市総合計画審議会 第1回専門部会 出席者名簿

第4部会 教育分野

※委員50音順、敬称略

		氏 名	備 考	出欠
福井市総合計画審議会	部会長	島田 貢明	仁愛女子短期大学 教授	○
	副部会長	鈴木 干城	福井青年会議所 専務理事	○
	委員	桶師 幸恵	福井市連合婦人会 会長	○
	委員	加藤 貞信	福井市議会	○
	委員	齋藤 万世	認定NPO法人 福井県こどもNPOセンター 理事長	○
	委員	佐々木 瑠奈	公募委員	○
	委員	森岡 咲子	若手起業家	○
市	総合計画策定 会議	東 正一郎	教育委員会	○
		山田 幾雄	総合政策室長	○
	事務局	山本 誠一	総合政策室副課長	○
		塩谷 靖喜	総合政策室主任	○
		山口 秀明	総合政策室主幹	○
		落合 大輔	総合政策室主査	○
		松田 佳恵	総合政策室主査	○